

第4回「日本医師会 赤ひげ大賞」受賞者

■栃木県医師会推薦 たかはし あきひこ 高橋 昭彦 医師 54歳 ひばりクリニック院長



0歳から100歳までの患者を対象として幅広く地域の医療を担う傍ら、在宅療養支援診療所として設立したNPO法人「うりずん」の理事長として小児の在宅医療に尽力。医療的ケアが必要な子どもの家族が24時間過酷な介護を強いられる中、人工呼吸器をつけた子どもを預かる重症障害児者レスパイトケア施設を開設。子どもにとって楽しい場所であるとともに、親たちが安心して預けることができる場所をつくることで家族の暮らしを支援している。

■神奈川県医師会推薦 やまなか おさむ 山中 修 医師 61歳 ポーラのクリニック院長



日本三大日雇い労働者の街、横浜市中区寿町で、住民の「医衣食職住」環境を改善すべく医療施設を開設。「家族がいない人のための町医者」になることを診療の理念として、身寄りのない高齢者や疾病を抱える地域住民の人生の質の向上を目指している。また、地域のチームリーダとして自身で立ち上げたNPO法人「さなぎ達」と協力し、路上生活者の夜間パトロールとともに健康状態の把握、食事の提供等にも従事している。

■岐阜県医師会推薦 つちかわ けんざぶろう 土川 権三郎 医師 63歳 丹生川診療所院長



「患者さんの希望に応え、希望を叶えてあげたい」という思いから地域医療・在宅医療に取り組む。患者は赤ちゃんから高齢者までさまざま、多岐にわたり診察。在宅で暮らしたいと願う全ての人の希望を実現するため、対象者一人ひとりに焦点を当てたケア・カンファレンスを週1回行う等の努力の結果、在宅で看取りをする人が町内の全死亡者の33%となった。アルコール依存症の問題にも携わり、地域医師の連携に努めている。

■鳥取県医師会推薦 たかみ とおる 高見 徹 医師 66歳 日南町国民健康保険日南病院名誉院長



「まちは大きなホスピタル」「まちの道路は病院の廊下」をモットーに積極的にまちに出て、毎日の往診では100km走ることも珍しくない。高齢化率46.8%でも、在院日数は全国平均を大きく下回るなど、高齢になっても家族や地域で見守りを続け、自宅に住み続ける高齢者が多いまちづくりに貢献している。また、日南病院のモデルが今後の都市部での地域医療に必ず役立つと考え、新しい地域包括医療ケアシステムの構築にも奮闘している。

■熊本県医師会推薦 おがた けんいち 緒方 健一 医師 59歳 おがた小児科内科医院院長



開院当初から一般診療を行う傍ら、当時は一般的ではなかった小児在宅医療支援を自ら開始・発展させた。超重症児とその家族及び小児在宅医療に関わる全ての人々が安心して在宅医療に取り組めるようネットワーク作りにも尽力。また医療型短期入所施設「かぼちゃんクラブ」を併設し、家族の負担の軽減にも努めている。全国的に評価の高い開業小児科医が出務する小児救急医療「熊本方式」においても、中心的な役割を担っている。

年齢は2015年12月末現在

「日本医師会 赤ひげ大賞」について

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催となり「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設したものである。

【対象者】

病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。原則として、70歳未満の方を優先。

【推薦方法】

各都道府県医師会会長が推薦（原則1名以上2名以内）

選考委員

羽毛田信吾	(昭和館館長、宮内庁参与)
向井 千秋	(宇宙航空研究開発機構 技術参与、東京理科大学副学長)
山田 邦子	(タレント)
小林 光恵	(作家)
神田 裕二	(厚生労働省医政局長)
飯塚 浩彦	(産経新聞社専務取締役)
河合 雅司	(産経新聞社論説委員)

他日医役員

【表彰式・レセプション】

1月29日（金）帝国ホテル 東京

表 彰 式：午後5時～ 本館中2階「光の間」

レセプション：午後6時～ 本館4階「桜の間」